

社会的な見方・考え方を働かせ、自分の考えを表現する児童の育成

— 小学校社会科における身近な地域素材を活用した問題解決的な学習過程の充実を通して —

大和町立小野小学校 中津川 智

1 研究主題について

学習指導要領の小学校社会科の目標に、公民としての資質・能力とは、「グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な資質・能力」という記述がある。中学校では、上記の記述の前に「広い視野に立ち」という文言が加わり、小学校社会科から中学校社会科への学びの接続・発展を意図しており、その重要性を表している。このことから、小・中学校社会科における共通の視点である社会的な見方・考え方を児童が働かせ、授業の課題を主体的に追究・解決することができるような授業づくりをすることが最も大切であると考えた。そして、社会的な見方・考え方を働かせて導き出した自分の考えをまとめ、他者に考えを表現できる児童の育成は、小学校から中学校への学びの系統性・連続性を強め、社会的な見方・考え方を働かせ、将来の日本社会をよりよい方向へと変えていこうとする社会の形成者の育成につながると考え、この主題を設定した。

2 研究の方法

(1) 授業づくりに関わる課題

年度初めに行った事前アンケートにおいて、「社会科の学習で自分の考えを表現することは得意ですか」という質問に対し、20名の児童が「苦手」「どちらかといえば苦手」と回答した（図1）。

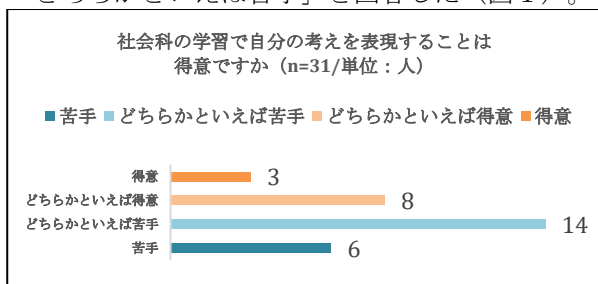


図1 事前アンケート（一部）

理由として、「自分の考えが浮かばないから」「発表することが恥ずかしいから」というものが多かった。このことから、この研究には自分の考えを表現しやすくするための工夫が必要であると考えた。

(2) 研究の手立て

①社会的な見方・考え方を働かせることができる身近な地域素材の活用

児童にとって学習内容が分かりやすいものとなり、

主体的な学びを実現するためには、児童の学習意欲を喚起し、追究したくなるような社会的な見方・考え方を働かせることができると考える。その際に、教科書の内容と類似していたり、対照的であったりする内容を、児童にとって身近な地域素材を中心に引き上げる。そこから、社会的事象を位置関係、時間関係、人々の相互関係に着目して捉えたり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりできるようにすることで、深い学びの実現を図っていききたい。

②ICTの活用により自分の考えを生み出し、表現する活動の充実

校外学習等から、実物資料の有用性は十分に理解しているが、学習内容全てを実物で提示することは困難である。しかし、ICTを効果的に活用することで、たとえ実物資料が提示できない学習内容でも疑似的に観察・体験することができるとともに、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力を養うことができると考える。そこで、地図アプリで地形や自然条件などを疑似観察したり、Google Jamboard（以下、Jamboardとする）で友達と自分の考えを比較しながら考えを深めたりすることで、深い学びの充実を図っていききたい。

③問題解決的な学習過程の充実

社会科の学習内容をよりよく理解するためには、指導事項をただ教えるのではなく、児童が社会的な見方・考え方を働かせることができるような問題の設定が大切であると考えた。そのために、社会的事象同士のつながりに気付かせる問題の提示を行う。提示した問題から、位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係に着目して、社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えたり、社会への関わり方を選択・判断したりすることで児童の考えを表現させることを図っていききたい。

3 授業実践Ⅰ

小単元名：暮らしを支える食料生産

(1) 社会的な見方・考え方を働かせることができる身近な地域素材の活用

児童にとって身近な学習となるように、総合的な学習の時間で行っている米作りを想起させることで、米の産地についての学習が自分事として捉えられるようにした（図2）。教科書で取り上げられて

いる日本各地の米作りの様子の写真と、自分たちの行っている米作りの現状を比較しながら、宮城県の銘柄米も取り上げ、宮城県の米作りに着目させた。そこから、米作りが盛んな地域について視野を広げ、本時のめあてへとつなげた。

授業実践Ⅰの事後アンケートにおいて、総合的な学習の時間の米作りの話と関連付けたことについて26名の児童が「他教科の学習内容とつながって理解が深まった」と回答した。また、宮城県の銘柄米を扱ったことについては、27名の児童が「身近なもので興味が湧いた」などと肯定的な意見が多かった。これらのことから、身近な地域素材の活用は社会科の学習の充実化に効果的であると考えられる。



図2 総合的な学習の時間で育てている米（ひとめぼれ）

(2) ICTの活用により自分の考えを生み出し、表現する活動の充実

自分の考えをノートにまとめる学習を経て、グループの友達とJamboardを通して、互いの意見を共有する場面を設定した（図3）。授業実践Ⅰ以前から、「自分の考えを表現する→考えを共有する→自分の考えを再構築する→全体共有する」という形式での学習を継続してきたことで、自分の考えが記入できなかった児童も自分の考えを表現することができていた。

授業実践Ⅰの事後アンケートで、23名の児童が「友達の考えを見て、自分の考えが深まった」「自分の考えを出せてうれしかった」と回答した。自分の考えが記入できなかった児童には、友達の考えを基に自分の考えを導き出すきっかけになった。また、ノートに記入できた児童も、友達の考えを受け、更に自分の考えを深めるきっかけとなっていた。Jamboardの活用が、児童の考えを引き出すための効果的な手立てになったといえる。



図3 班ごとに意見をまとめたJamboard

(3) 問題解決的な学習過程の充実

米作りが盛んな地域の特色について社会的な見方・考え方を働かせるために、身近な地域素材で自作教材を作成した（図4）。

寒冷な地域で米作りが盛んな理由を考えさせることで、問題解決的な学習過程の充実を図った。自作教材には解説等は入れずに、地図と最高・最低気温を表すだけに留め、児童にとって社会的な見方・考え方を働かせることができるように配慮した。

授業では、提示した後に児童から「何だろう、これ」「何が分かるのかな」といった声が聞かれた。自分の考えを書いた後に、友達とグループになって、盛んにお互いの意見を交流させていた。意見を交流する中で、最高・最低気温の差に気付き、寒冷な地域ではその差が大きいことから、読み取れる情報が昼夜の寒暖差の大きさであることを導き出すことができていた。児童が自作教材から読み取れる情報を一生懸命に考え、問題解決しようとする姿勢が見られた。

授業実践Ⅰの事後アンケートで、身近な地域素材の資料を活用したことについて19名の児童が「教科書にはない資料で興味が湧いた」「気温を比べることで新しい発見があって楽しかった」と回答した。それに対して、12名の児童が「内容が難しかった」と回答しており、一部の児童にとって分かりにくい資料になってしまった。今回の自作教材は、「寒暖差」という新しい視点に気付く成果があった。しかし、社会的な見方・考え方を働かせるのが難しい児童に、資料から情報を読み取れるようにするための支援の工夫が必要であることが分かった。

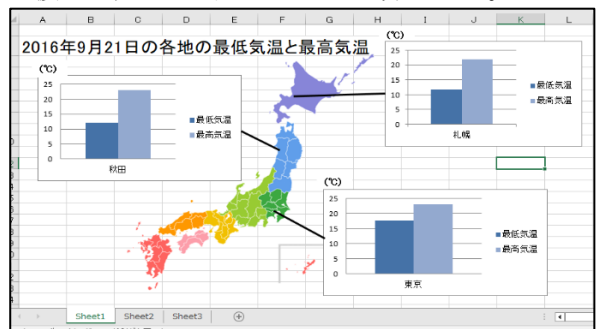


図4 関東と東北・北海道の最高・最低気温（自作教材）

4 授業実践Ⅱ

小単元名：これからの食料生産とわたしたち

(1) 社会的な見方・考え方を働かせることができる身近な地域素材の活用

児童にとって身近な地域素材である大和町で実施されている食料生産の新しい取組を提示した。教科書にある4つの取組と整合性を持たせ、生産者の6次産業化の事例として「舞ちゃん舞茸」、ブランド食材の事例として「七ツ森サーモン」、養殖業の事

例として「伊達いわな」、環境に配慮した農業の事例として「郷の有機」を扱った。

身近な地域素材を活用した資料作成の際には、2つの視点を意識して作成した。1つ目は、授業実践Ⅰでの自作教材活用についての事後アンケートにあった「分かりにくかった」という意見を受けて、資料から読み取れる情報が何なのかが、児童に考えやすい内容になるようにすることである。2つ目は、読み取らせたい内容を明確にし、そのことを児童が自然に読み取れるようにするという、ゴールを意識して作成したことである。教科書でこれまで学習した食料生産上の課題と、大和町の4つの取組が持つ課題解決の可能性と、4つの取組同士の共通点が結び付くことで、児童は社会的な見方・考え方を働かせることができていた。「七ツ森サーモン」と「伊達いわな」は、養殖業の例でもありながら、ブランド食材の例でもあることや、どちらもブランド化による食材価値の向上により、「農業・水産業における担い手の減少」の課題解決の可能性を秘めていることに気付くことができていた。更に、自分たちの住む大和町で、食料生産の新しい取組が行われていたことに、29名の児童が「とても興味が湧いた」「興味が湧いた」と事後アンケートで回答していたため、自分たちの故郷の新しい魅力に気付くきっかけにもなったと考えられる。

(2) ICTの活用により自分の考えを生み出し、表現する活動の充実

Google スライド（以下、スライドとする）を使い、グループごとの資料について協働して調べ、児童の考えをスライド上に表現させた（図5）。これまでは、自力では資料の読み取りが困難な児童や、読み取れてもノートに自分の考えをどう表現したらよいのか分からない児童が数人いた。しかし、授業実践Ⅰと同様に「自分の考えを表現する→考えを共有する→自分の考えを再構築する→全体共有する」という形式での学習を継続してきたことで、なかなか書けなかった児童も自分の考えを表現することができていた。事後アンケートでも、27名の児童が「友達と相談できて、とてもまとめやすかった」「友達と相談できて、まとめやすかった」と回答していたため、友達と自分の考えを比較する過程があることで、自分の考えを表現しやすくなるきっかけとなったと考えられる。

2班	七ツ森サーモン
取組の内容（長くて2～3行くらい） ・七ツ森サーモンは、大和町の吉田川上流で繁殖している。 ・人工の餌しか食べないため、寄生虫の心配がない。 ・通常のサーモンより脂がおさえられた、甘みがある上品な味わいが特徴。	
この取組のよいところ（生産者と消費者の立場から）	
生産者	消費者
・ブランド化により、知名度が上がり出荷先が増える。 ・色んな場所に運んで、たくさん買ってもらえる。	・消費者は、安全・安心で高品質な商品を買うことができる。 ・少し高いけれど美味しいサーモンを食べることができる。

図5 児童が編集したスライド

(3) 問題解決的な学習過程の充実

問題解決的な学習過程の充実を図るために、大和町の食料生産の取組について調べる自作教材を作成した（図6）。前述した大和町の4つの取組について取り上げ、各取組の概要だけでなく、これまでに学習してきた「農業・水産業における担い手の減少」「輸入増による食料自給率の低下」「環境への負担軽減」の課題を解決するための視点を盛り込んだ内容にした。また、上記の3つの課題のうちの1つに対しての解決の視点だけでなく、それ以外の課題を解決するための視点も同じ取組内に盛り込んだ。そうすることで、各取組同士の特色や解決するための視点の中に共通点があるということに気付くことができるようにし、より深い問題解決的な学習となるように配慮した。

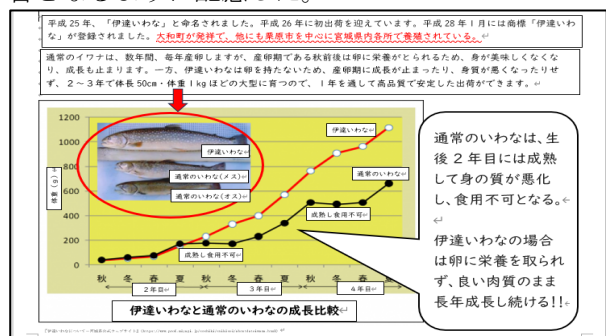


図6 作成した自作教材の一部

授業実践Ⅱでは、それぞれの取組の概要や利点などを簡潔にまとめ、自作教材を使って調べる活動を行った。グループごとに所定の自作教材を割り当て、1つの取組について協働して調べ学習を行う形式にした。児童は、自作教材の中の文章や資料を読み取り、自分のグループの取組の概要、生産者の立場と消費者の立場から見た利点について、スライドにまとめた。児童は、自作教材から取組の概要を理解し、読み取ったキーワードを使いながら、スライドにまとめることができた。事後アンケートでは、自作教材を使って調べる活動について、26名の児童が「調べるのがとても楽しかった」「調べるのが楽しかった」と回答していた。その理由の中に、「取組の内容がよく分かったから」「知らないことがたくさん分かったから」という意見が多かったため、授業実践Ⅰの反省を生かした成果があったと考えられる。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

授業実践Ⅰの身近な地域素材の活用に関して26名の児童が「身近なものが出てきて興味が湧いた」と回答し、授業実践Ⅱの身近な地域素材の活用に関しては、29名の児童が「とても興味が湧いた」「興味が湧いた」と回答した。このことから、児童

にとって身近な地域素材を扱うことで、児童の学習意欲が高まったと考えられる。また、「社会科の学習内容で、これまでに学習したこととつながったり、比べたりすることで理解が深まったことがありますか」という質問に対しては、事前アンケートでは4名の児童だけ「よくあった」「あった」と回答した。しかし、授業実践Ⅱの事後アンケートでは、同じ質問で18名が「よくあった」「あった」と回答したことから、児童に身近な地域素材の活用は、児童の社会的な見方・考え方を十分に働かせるきっかけになったと考えられる。

I C Tの活用については、Jamboard やスライドを使い、自分の考えを表現することができる児童の育成を目指して取り組んだ。「社会科の学習で自分の考えを表現することは得意ですか（ノート、タブレット、発表等）」という質問に対して、「得意」「やや得意」と回答した児童が、事前アンケートでは14名で、事後アンケートでは16名であった。その理由については、「友達と考えを話し合っ、自分の考えを持つきっかけになった」という意見が多かった。このことから、友達と意見交流をしながら、自分の考えを再構築することで、自分の考えを表現することが苦手な児童に対しても有効な手立てとなったと考えられる。

問題解決的な学習過程の充実では、自作教材を使った問題解決的な学習過程について、授業実践Ⅰの事後アンケートで18名の児童が、「調べるのがとても楽しかった」「調べるのが楽しかった」と回答した。授業実践Ⅱの事後アンケートでは、26名に増えた。その理由として「取組の内容がよく分かったから」「他の取組にもつながるところがあったから」という意見が多くあったため、授業実践Ⅰの反省を生かした成果が得られたといえる。また、自作教材の活用により、児童が社会的な見方・考え方を働かせることができたと考えられる。身近な地域素材の活用の項にあった事後アンケートの「社会科の学習内容で、これまでに学習したこととつながったり、比べたりすることで理解が深まったことがありますか」という質問に対して18名が「よくあった」「あった」と回答していたことも、このことを裏付けている。一方で、授業実践Ⅱの自作教材では、スライドに自作教材中の解説をそのまま転記する児童が多かったため、授業実践Ⅰの反省を生かして、資料から読み取れる情報は何かを分かりやすくするために解説を充実させたことが、自分の考えを表現することへの弊害となる課題も見られた。

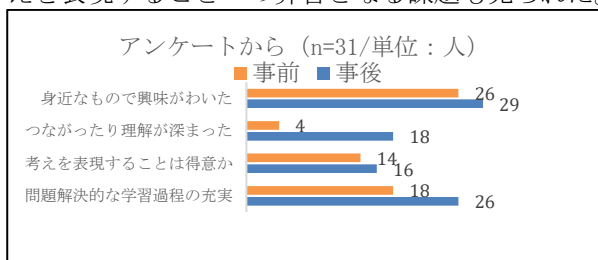


図7 2つの授業実践を受けて

(2) 課題と展望

(1)を受けて、以下の3点を今後の課題とする。

①社会科の授業づくりでは、可能な限り児童に身近な地域素材を活用することで、学習意欲の喚起、学習内容と児童の知識との結び付きを図る。そうすることで、児童の社会的な見方・考え方を働かせることができるようにする。

②I C Tの活用については、Jamboard、スライドを始め、児童の考えを表現させるのに適したツールであるが、事後アンケートで「社会科の学習で自分の考えを表現することは得意ですか（ノート、タブレット、発表等）」という質問に対して、「苦手」「どちらかという苦手」と回答した児童が最終的に15名いたことから、児童に自分の考えを持たせる取組として十分だったとは言いきれない結果であった。また、苦手な理由として「発表することが恥ずかしいから」や「間違っているかもしれないと思うと発表しにくいから」という意見が多く見られた。児童が自分の考えに自信を持って発表できるようにする工夫が必要である。

③問題解決的な学習過程の充実では、自作教材について、児童の社会的な見方・考え方を十分に働かせることができる構成にすることが最も重要である。そのため、自作教材であっても解説文などは極力避け、資料に示された事実から児童が学習内容を読み取れるような構成にする。

【参考文献】

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説
社会編（文部科学省）2017

【図表等の許諾について】

図2は授業実践Ⅰの中で、図4は授業実践Ⅱの中で、児童が作成した提出物の一部である。児童の名前は伏せ、個人を特定しない形とすることで学校長の許諾を得た。